

見える優しさ、見えない優しさ

(原文)

山本 智也 (14 歳)

長野県

山ノ内町立山ノ内中学校

僕の故郷は、長野県の北東部にある山ノ内町です。町では、志賀高原ユネスコエコパークとして、自然も人間も豊かに共生できる町づくりを目指しています。また、人権や平和、福祉にも力を注いでいます。そのためか、自分も町の福祉の力になることができればいいなと思っていました。

中学校に入学した年に、山ノ内中学校はユネスコスクールに認定され、学校では ESD(持続可能な開発のための教育)に取り組んでいます。生徒会でも、SDG s の目標達成を目指して、様々な活動をしています。僕は、一年生の時に、福祉や人権、平和に関する活動が中心の「ふれあい委員会」に入りました。そして、今日まで継続して活動しています。

そんな僕が、「ふれあい委員会」での活動を通して考えた「優しさ」について皆さんにその思いを伝えたいと思います。

1 年生の 4 月、委員会に入って初めての活動は、「ペットボトルキャップ収集」でした。毎週水曜日と木曜日の朝に、昇降口で委員が収集しています。キャップだけでなく、アルミ空き缶と古切手も収集します。毎回、収集物の重さや枚数を計測し、全校に発信しています。この仕事は、意外と重労働でかなり疲れますが、その分沢山集まった時は、嬉しくかなり達成感のある活動です。ペットボトルキャップは、世界の子供達にワクチンを贈るシステムです。また、アルミ缶は、業者に引き取って換金し、年度末に歩行器などを購入し、福祉施設に寄付してきました。施設のお年寄りから感謝の手紙が届いた時は、もう嬉しくて嬉しくて・・・少しでも町の人のためになれたことを実感しました。

次は、「ほのぼのランチレター」活動です。町の福祉協議会が、独り身のお年寄りのために、元気の出るような昼のお弁当を作り、そのカバーに、僕たちの学校生活の様子を書いた手紙を添えるのです。字を丁寧に書き、元気が出せるような手紙を何枚も書きました。その反響は、五月の校長講話で紹介されました。お年寄りの方々に元気を与えていること、文面がとても素晴らしいことなどを評価していただき、改めて、この活動が好きになりました。

紹介する最後の事例は、書き損じはがきの収集でルワンダ人の人に義足を贈れたということです。僕が 1 年生の時の冬に、ムリンディ・ジャパンワンラブ・プロジェクトのリーダーである、ルダシグワ・ガテラさんと真美さん夫婦が山ノ内中学校に講演に来られました。ルワンダでは、1990 年から 93 年に紛争が起こり、多くの人が虐殺で犠牲になり、また、犠牲者以上の多くの人が、腕や脚を失っ

てしまったというのです。内戦で足を失った人々に義足を作り続けているのが、ガテラさん夫婦です。

講演の初めは、僕は軽い気持ちで聴いていたのですが、二人の話に吸い込まれ、強い恐怖感と戦争に対する嫌悪感を抱きました。と同時に、義足を作り続けているお二人に尊敬の念も抱きました。

講演の後、義足作りになにか自分達にできることはないかということになり、書き損じハガキを集めることになりました。ふれあい委員会を中心に2年の秋まで地道に集め、それを、ガテラさんに送りました。すると、一人分の義足が作れましたというお返事が届いたのです。僕らの活動が、国を超えて、ルワンダの人を支えることができたのです。これがどんなに嬉しく、達成感があったこととは言ってもありません。

これらの活動を通して、僕は見える「優しさ」と見えない「優しさ」があることに気づきました。歩行器を贈る、ランチレターを届ける、義足が贈られた・・・は見える優しさです。それらの優しさを支えているのは、僕ら一人一人の日頃の「思いやり」だと思いました。結果はすぐには見えませんが、今後もその思いやりを胸に生きていこうと思っています。